

# 茶の湯 文化学会 会報

第128号 / 2026年3月25日  
発行 茶の湯文化学会  
京都市左京区下鴨森本町15  
生産開発科学研究所内  
〒606-0805  
TEL 075-702-9270  
FAX 075-702-9314  
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp  
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

No.128

## 佐賀県立九州陶磁文化館

### 『初期伊万里ビツグバン』展に見る茶陶

巖 由季子

日本初の磁器は十七世紀前半の肥前（現在の佐賀県と壱岐・対馬を除く長崎県）で誕生した。開発成功から数十年の間に生産された製品は初期伊万里と呼ばれる。すでに肥前で作られていた陶器の窯で磁器も併焼することで始まり、朝鮮半島からもたらされた窯業技術を基盤としながら中国風の染付磁器を生産する新たな産業として急成長を遂げた。初期伊万里は当時日本に輸入されていた中国の染付磁器の碗皿を目指したため器種は食膳具を中心とするが、茶陶も少量ながら生産されており、茶陶らしい作りのみられる茶碗や水

指、繊細な造形の香合などが見られる。なかには注文者の存在がうかがえるような趣味性の強い作例もあるが、茶の湯の名品として知られるものは多くない。開館四十五周年を迎えた佐賀県立九州陶磁文化館が開催した特別企画展「初期伊万里ビツグバンー日本磁器始まりの全貌ー」（二〇二五年十月四日〜十二月七日）は草創期の肥前磁器の起源と発展に焦点を当て、生産地の出土資料を中心に展示構成を行い、最新の研究成果を紹介した。試行錯誤する中で生み出された多様な技法や、国内市場の需要から生み出された製品の多

様さを示すため伝世品も展示し、これまで紹介される機会が少なかった個人蔵の初期伊万里の茶陶を取り上げた。本稿ではその中から五点を紹介する。

初期伊万里では小碗のほか、茶の湯で用いられた可能性が高い茶碗が生産された。（染付山水文茶碗）（写真1）は内面を無釉としていることから火入とも思われるが、見込中央をくぼませ、高台内にも強く轆轤目を入れる作為がみられることから、雲堂手などを意識した内面無釉の茶碗として作られた可能性が考えられる。

日本では中世以降、中国の染付



写真1

碗（紀三井寺）が頻繁に用いられ、遠州自身の茶会で染付の茶碗や懐石具が取り入れられると染付磁器製の茶道具が流行した。筒形の香炉・火入を転用した染付の雲堂手茶碗が用いられたことを背景に、このような茶碗が肥前に求められたのかもしれない。

染付を伴わない白磁茶碗（写真2）

磁器が高級な食膳具として受容され十五世紀以降大量に輸入されていたが、茶の湯の道具としては十六世紀まで本格的に用いられなかったという。しかし、小堀遠州が幕府の茶道指南役を務めるようになる和使用例が増加する。徳川將軍家の茶会で利休伝来の染付茶

は胴の二か所に指や篋による凹みが見られ、茶碗としてのみどころを創出する意識が認められる。高台内にも渦状の轆轤目を作り出していることから、あきらかに茶の湯の茶碗として製作されている。本作に関しては朝鮮陶磁の影響が強いように思われる。

茶の湯で用いられる香合は炭手前の確立によって多彩になり、さまざまな合子が香合として取り入れられるとともに、国内外で新たに生産された。安政二年（一八五五年）刊行の『形物香合相撲』は染付香合を多数含み、中国産の染付香合が受容された様子がかげえるが、初期伊万里でも染付香合が作られていた。初期伊万里の鳥形香合（写真3）は内部に篋などの道具を用いて土を削り取った痕跡があり、羽の模様も一筋ずつ彫って表現されたものが多い。こうした手間のかかる技法は後に量産化に伴って見られなくなる。出土例もきわめて少なく、注文などに応じて少量生産された可能性が考えられる。ほかにも水指や中次（写真4）、振出（写真5）などがあるが、いずれも伝世例は少なく貴重な作例である。

初期伊万里は厚い器胎やおおらかな染付文様の特徴として知られるが、これらの茶陶を見ると上質



写真2



写真3



写真4



写真5

な製品を作るべく試行錯誤していた様子がかがえる。しかし、一六四〇年代以降に中国系の技術を新たに導入して飛躍的な革新を遂げると、国内市場向けに中国風の磁器製品を供給する初期伊万里の時代は終焉を迎える。生産効率化を求める過程で手間のかかる技法は行われなくなり、茶道具の生産量自体も減少した。肥前では磁器

生産の開始から一六四〇年代までの短期間に、優れた茶陶が集中して見られる。

本展と同時期に五島美術館で開催された特別展「古染付と祥瑞―愛しの青」(十月二十八日〜十二月七日)では国内伝世の古染付と祥瑞の名品が詳細な作品情報とともに展示され、古染付の需要層がかがえる消費地の出土資料や、

古染付の影響がみられる初期伊万里なども紹介された。また、古染付・祥瑞に関する近年の研究に善田のお代氏によるものがあり、中国染付磁器の茶の湯における受容や、古染付に見られる朝鮮陶磁など他産地の陶磁器からの影響に関する研究が行われている。以上のような研究の進展から、中国磁器を目指して生産された初期伊万里

にも新たな検討を加えることが可能であると思われる。時の流行を反映し、茶の湯の道具として生産された初期伊万里の茶陶の生産と受容について、生産地における研究を基盤にしながら地域の枠組みを超えた研究の進展が今後期待される。

(写真1〜5の作品はすべて個人蔵)

## 理事会

令和七年度第三回理事会が、令和八年三月一日(日)午後二時よりZoomミーティングで行われた。理事十五名が出席し、以下の議題について討議された。

一、令和八年度総会提出議案について

・令和七年度事業報告、決算報告

・令和八年度事業案、予算案

二、会長候補選考委員会からの諮問

三、令和八年度総会・大会について

四、会誌・会報について

五、その他

飯島副会長の司会進行で議題に沿って議事が始まった。

第一議題では、令和八年度総会提出議案として、令和七年度事業報告・決算報告、令和八年度事業案・予算案について、各担当理事より報告と説明が行われ承認された。

第二議題では、会長候補者選出

に関する内規に従い、会長候補選考委員会委員から、現会長の山田哲也会長を引き続き会長候補として選出し、令和八年度総会の議案とすることが決まった。

第三議題では、令和八年度総会・大会について提案され、承認された。

日程・令和八年六月十三日(土)・

十四日(日)

第一日目

見学会 藪内家

「燕庵および路地」

拝観・呈茶

懇親会 (京都新阪急ホテル

「ブルヴァール」)

第二日目 総会・大会

会場・同志社大学今出川キャンパス

シンポジウム・テーマ

「京都と茶の湯の近代化」

第四議題では、会誌について、山田編集委員長より会誌四十五号の進捗状況が報告され、三月末に発行予定であるとの報告があった。会誌のオンライン公開について

て、編集会議にて議論されたことが報告された。投稿規程・著作権等の見直しを編集委員会にて早急に行い、理事の確認後、令和八年度総会の議案とすることとなった。

会報について、中村幸編集委員より会報一二八号が制作中で三月末に発行予定であることが報告された。

第五議題では、高知例会の永吉

溪滋理事の訃報が報告された。

近畿例会担当幹事として佃梓央

氏が推薦され承認された。

## 例会

東京例会

(令和七年十二月六日)

「烏蓋と二種の油滴天目―再現実験にみる建窯系天目釉の特徴―」

岩田澄子・横山直範

『君台観左右帳記』に記される

唐物天目七種のうち、曜変・油滴・建盞(のきめ)は福建省建窯製で、国宝の名品も知られる。ところが「烏蓋」は、「湯盞の形。土くすりは建盞と同じ」という簡略な記載で、その実態(産地、釉薬、伝世品)は現在も不詳といえる。

烏蓋とは何か。京都市産業技術研究所では、中国出土陶片の分析値に基づいて、さまざまな条件を設定し、実際に焼成する再現実験を行なっている。これまで活用されていない漢文茶書(野本道玄『茶数字実方鑑』、三谷宗鎮『和漢茶誌』)も参照し、再現実験を通して考察した。

建窯の釉薬はアルミナ値の高い特異な組成で、各種の紋様は窯の中で様々に変化して生じた自然の産物といえる。実験では、龍窯(登り窯)の中で起きたと思われる複雑な環境変化を再現するように、複数回の繰り返し焼成・冷却を行なった。

青黒い烏のような「烏蓋」は、

建窯系釉薬を再加熱後、九〇〇度

近く（ガラスの固化温度）まで持続する強還元で冷却した時に現れた。太陽光に当ててみると、青と黒のガラス相に分相している。それをさらに加熱冷却すると、還元

近畿例会  
（令和七年十一月八日）  
「川上不白の初期の茶会記から―『京都諸方茶湯会付』を中心に―」  
岡本文音

の強さにより、曜変・油滴・禾目などが出現した。「烏蓋」は、建窯各種の中間生成物といえる。  
ところで、「油滴」の斑紋がで

きるメカニズムは「酸化鉄の発泡（その跡に析出）」と説明されている。しかし実験によると、建窯の輪郭が明瞭な油滴は、烏蓋（ガラスの相分離）ができた後に、鉄を多く含む青い相から結晶が析出するもので、そのメカニズムは「相分離」といえる。一方、北方の油滴は従来の説明通りで、「酸化鉄の発泡」といえる。  
輪郭が明瞭な油滴になるまでの条件は複雑で色々な要素があり、伝世する建窯の油滴は、絶妙なバランスで奇跡的に生まれたものといえる。

すべてにおいて、如心齋が客として参会しており、また如心齋の入室の名が三会において見える。また、他会記録では如心齋の会が二十五会、如心齋以外の会が一〇三会である。その一〇三会のうち、六十八会において、如心齋と不白が連れだつて参会している。全一四五会中、実に一〇七会において如心齋の名が記されている。これらのことから、『京都諸方茶湯会付』は、不白が江戸に拠点を移すまでの、京都における如心齋の許での修行時代の記録と位置づけられるであろう。  
また、『京都諸方茶湯会付』には添え書きがなされている箇所が多くあり、『不白筆記』や『不白翁句集』との関連付けもでき、併せて読むことができることも特徴として挙げられる。

「伸庵と川部太郎の茶の湯」  
木村栄美  
堺市が所有する数寄屋建築「伸庵」はもと東京の芝公園にあり、近代数寄屋建築を代表する仰木魯堂（一八六三―一九四二）の設計・監修による。本邸にある三畳台目の茶室「萬象庵」は昭和四年（一九二九）に完成、高橋箒庵（義雄、一八六一―一九三七）が命名し、昭和初期における近代数寄者たちの交流の場の一つともなった。しかし、魯堂の作品の一つとされながらも、本邸の存在及びその所有者についての詳細はあまり知られていない。本研究はその「伸庵」の所有者であった東京の道具商・川部太郎（号・緑水、一八九〇―一九三七）の人物像を明らかにするとともに、彼の関わった茶会を通して、得意先であった根津青山（嘉一郎、一八六〇―一九四〇）を始めとし、箒庵等近代数寄者との交流やその関係性、また道具商が近代喫茶文化史の中で果たしてきた役割について考察することを目的とし、今回その一部を報告する。

太郎は出身地である名古屋の道具商・米万で修行を積んだ後、大正五年（一九一六）ごろに東京の日本橋にあった川部商会（屋号・永清堂）の川部利吉の婿養子となった。以降大正十年ごろより昭和十一年（一九三六）ごろまでの間に、大師会の世話人、光悦会の理事、東京美術倶楽部の幹事を務めた。また太郎は根津青山を上得意としていたばかりでなく、青山の茶会においては、そのほとんどで亭主青山の薄茶代点、あるいは飯頭を務めていた。近代数寄者たちの一大イベントとなった昭和十一年十月に開催された昭和北野大茶湯等においても、青山に同伴して京都大徳寺本坊における青山の設えに携わっていたことが、箒庵の茶会記等から窺える。このことは青山と太郎が単なる得意先と道具商という関係だけでなく、青山の道具類の管理、茶会における取り合わせ等にも太郎にかなりの信頼を置いて任せており、箒庵が太

郎を青山の「参謀」と評している通り、その役割を担っていたと推測する。

## 例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合・未定についても合わせてホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

※東京・近畿例会では、会場とZoomのハイブリッド開催を行っています。オンラインの参加は、ホームページの例会参加申込フォームよりお申し込みと同時に、年会費二千円（会員）・四千円（非会員）をお振り込みください。

### 東京例会

令和八年五月三十日（土）  
午後二時～  
（会場・埼玉会館3B会議室）  
下村奈穂子

「初代根津嘉一郎の別邸の茶室」  
吉野亜湖

「近代日本茶の海外広告戦略としての喫茶空間―アメリカにおける〈茶庭〉としてのジャパニーズ・ティー・ガーデン文化」

令和八年十月十七日（土）  
午後二時～

（会場・未定）  
依田徹

「幕末鹿兒島藩の茶」  
長谷川祥子

「猿曳棚について（仮）」

令和八年十二月五日（土）  
午後二時～

（会場・未定）  
神保乃倫子・八木京子

「益田克徳の茶とその周辺 その七」

### 岩田澄子・横山直範

「建蓋と天目―資料と天目釉再現実験による考察」

### 東海例会

令和八年五月二十三日（土）  
午後三時～四時三十分  
（開場午後二時三十分）

（会場・昭和美術館 別館）  
木津宗詮

「『清技』（淡交社刊）昭和の茶道を支えた職人たち」

令和八年七月四日（土）  
午後二時～三時三十分

（開場午後一時三十分）  
（会場・昭和美術館 別館）

下村宗隆

「尾川久田流の茶の湯」

令和八年九月二十六日（土）  
午後二時～三時三十分

（開場午後一時三十分）  
（会場・昭和美術館 別館）

依田徹

「久松松平家の茶の湯―松山藩と裏千家を中心に―」

令和八年十一月七日（土）

午前十時～午後三時

（会場：昭和美術館）

茶会

近畿例会

令和八年五月二十三日（土）

午後二時～

（開場午後一時四十五分～）

（会場：大阪市立美術館 三階

ワークルーム）

安永拓世

「煎茶道の成立―売茶翁の神格化・

器物の伝来・茶の湯との関わり―」

杉谷香代子

「花月菴伝来の煎茶道具について

―特集展示「売茶翁から花月菴―

煎茶道はここから始まった!―」

より」

\*会場の三階のワークルームへ

は、エレベーターをご利用くだ

さい。

\*館内は原則飲食禁止です（水分

補給のみ可。ただしペットボト

ルや水筒などのフタ付きの容器

に限りません。）

\*館内への長い傘（日傘を含む）

の持ち込みはご遠慮ください。

傘立てをご利用ください。

\*当日は、「開館90周年記念特別

展 全力!名宝物語―大阪市美

とたどる美のエピソード」展開

催中です。学会名の入った封筒

を受付にてお示しください。招

待券をお渡しいたします。

令和八年七月十八日（土）

午後二時～

（開場午後一時三十分～）

（会場：同志社大学（仮）

小林仁

「吉州窯天目再考―禪宗・羅漢供

茶・茶百戯の視座から―」

守屋雅史

「大阪市立東洋陶磁美術館所蔵の

茶道具について」

令和八年十一月二十八日（土）

午後二時～

（開場午後一時三十分～）

（会場：泉屋博古館 講堂）

実方葉子

「住友春翠展関連（仮）」

竹嶋康平

「住友春翠展関連（仮）」

令和九年二月または三月（土）

午後二時～

（開場午後一時三十分～）

（会場：同志社大学（仮）

飯島照仁

「海外における茶の湯の報告（仮）」

佃梓央

「海外における煎茶の報告（仮）」

高知例会

令和八年六月二十八日（日）

午前十時～正午

（会場：高知県立文学館 慶雲庵

茶室）

「茶の湯文化学会二〇二六年度大

会の研究発表をテーマとしたシン

ポジウム」

発表者 未定

薄茶席 正午～午後四時

席主 二名、会費 千円

\*参会希望者は予め連絡をして下

さい

令和八年九月六日（日）

午前十時～正午

（会場：高知県立文学館 慶雲庵

茶室）

茶の湯関係文献を読み所感の発表

『茶道四祖伝書（現代語訳）』輪読①

令和八年十二月十三日（日）

午前十時～正午

（会場：高知県立文学館 慶雲庵

茶室）

茶の湯関係文献を読み所感の発表

『茶道四祖伝書（現代語訳）』輪読②

軽食茶事 正午～午後四時

席主 三名、会費 三千元

\*参会希望者は予め連絡をして下

さい

令和九年二月七日(日)

午前十時～正午

(会場)・高知県立文学館 慶雲庵  
茶室)

茶の湯関係文献を読み所感の発表

『茶道四祖伝書(現代語訳)』輪読③

高知支部二〇二七年度事業計画

茶席 午前十時～午後四時

茶の湯文化学会の研究成果を实践  
する。茶の湯を一般の方々に親し  
んでもらうため「床飾り」「道具  
立て」はするが、お点前はお客次  
第として楽しめる茶席を設ける。

開催予定日

高知新聞「こみゅっと」に掲示  
会費 四百円

## お知らせ

令和八年度総会・大会の

ご案内

令和八年度総会・大会を左記の

日程で計画中です。詳細は令和八

年四月に郵送・ホームページにて

ご案内いたします。

日程・令和八年六月十三日(土)・

十四日(日)

第一日目

見学会 藪内家

「燕庵および路地」

拝観・呈茶

懇親会 (京都新阪急ホテル

「ブルヴァール」)

第二日目 総会・大会

会場・同志社大学今出川キャンパス

シンポジウム・テーマ

「京都と茶の湯の近代化」

## 新刊紹介

『現代語訳』大正名器鑑 井戸茶

碗編

高橋義雄著 宮帯出版社編集部訳

定価七、七〇〇円(税込)

『現代語訳』大正名器鑑 長次

郎・ノンコウ・光悦・仁清編

高橋義雄著 宮帯出版社編集部訳

定価八、二五〇円(税込)

『懷石新書 革命と継承の日本料理』

依田徹著 淡交社

定価二、五三〇円(税込)

『もつと知りたい 千利休と茶の

湯』

千宗屋著 (株)東京美術

定価二、五三〇円(税込)

## 訃報

本学会理事の永吉溪滋理事が令和七年十二月二十七日にご逝去されました。永吉理事には高知例会を立ち上げ、牽引していただきました。会員の皆様に訃報のお知らせをさせていただきます。

※二〇二六年度年会費を払込みく

ださいますようお願いいたします。

いたします。

